

第2回吃音指導講座 参加者からの感想・意見・質問 並びに 感想・意見・質問への『感想・意見・回答』

言語臨床教育研究会 代表 梅村正俊

第2回吃音指導講座へ、本当に多方面、そして多数の方々から参加していただきありがとうございました。

また、感想も、記入時間がない中、多数寄せていただきありがとうございました。次回？の内容やスムーズな運営の参考にさせていただきたいと思います。

ところで、いくつかご質問やご要望があったのですが、氏名がなく、どなたに返事を差し上げれば良いかわかりませんでしたので、「質問に対する回答」だけでなく、感想を読ませていただいていた「感想に対する感想」も含め若干述べさせていただきます。

そのことに対する意見・反論がありましたら、FAXをいただければと思います。同様に、相談室のHPから、皆さんにご覧いただけるようにしたいと思います。

掲載に当たって

感想には、お名前を記載してくださった方もいらっしゃいましたが、公平を期す為に、全て無記名とさせていただきます。

基本的には、句読点や空白は、原文のままです。

時間の無い中での記載でしたので誤字・脱字が若干見受けられましたが、それは訂正して掲載してあります。

ただ、記載者の気もちが込められていると感じる箇所は、あえて訂正しませんでした。それ以外の誤りは、全て、入力ミスとお考え下さい。

は、「感想に対する感想」や「質問に対する回答」です。

感想・意見・質問

吃音について系統だてて指導の仕方を教えていただき誠にありがとうございました。吃音を直すことばかりに目が行き、どんなことをすればよいのか焦るばかりでいました。吃音とはどういうものかをとらえ、本人や保護者のニーズをとらえ、環境面を考慮しながら実績を積んでいかなければならないと思いました。

直す指導も必要でしょうが、育む指導を行っていくことで子ども自身が自分で成長していくのだ改めて感じました。

川合先生のお話は初めてお聞きしましたが、今まで分からないでいた指導法の内容を詳しく教えていただきとても勉強になりました。

新しい理論・実践を教えていただき、また、実技と 大変ありがとうございました。

小林先生のお話がとても参考になりました。

また、長澤先生、小林先生から、症例としてばかりでなく、人として、一人の人間を育てる、生きる力を育てているということをあらためて感じ、心の芯にいつでももっていよう、立ちかえろうと思いました。

また、冰山だけを見ていないで、表面上冰山の下の部分も把握してみよう、それにチャレンジしてみよう、アセスメントしてみようと思いました。

川合先生の最新知見の事例も聞きたかったです。

子どもとの信頼関係をきずき、音読、子どもに気持ちよと感じてもらおうようやってみます。

小児の臨床経験が浅い中、幼児の吃音相談を細々とやり始めていますが、先日学童の親御さんからも相談のご連絡が来ました。

専門ではないとは言われてられず、本腰を入れて相談・訓練できるようにならなくては行けないと思い参加させていただきました。

周りで吃音の相談にのっていただける場がなかったり、吃音の勉強会もなかなかない状況で、本を読むだけではなかなか臨床に取りくみにくい状況でした。

具体的な指導法や評価の仕方など知りたいことを的確に教えていただいて、大変勉強になりました。

実際に臨床を行うための大枠を教えていただいたと思います。

子どもに向き合いながら、また勉強を重ね、専門家と呼ばれるようになりたいと、思いました。

音読読みが難しいですね。

最後にコツが分かりましたが、まだまだできません。

また練習し、いつか使えるようになりたいです。

「**呼ばれるように**」は、おそらく、正しくは「**呼ばれるように**」だと思うのです。でも、この文に出会った時、この先生の2つの想いに、ハッとさせられました。ご本人が自覚しているかどうかは、別問題です。私が勝手に感じたことです。

ひとつは、文字通り、他者から見て『**専門家と呼ばれる**』ようになりたいこと、そして、もうひとつは、自分自身を自分で『**専門家と呼べる**』ようになりたいことです。

唯、どちらにしても難しいことです。「自分は専門家である」と唱えてみても、他者がそれを認めない限りは、唯我独尊です。正直、一度は言ってみたい言葉では、ありますが。

『**専門家と呼ばれる**』そして『**専門家と呼べる**』、久しく忘れていた言葉です。

講演会などで、先生方に対して、「親は、先生方が専門家だと思うから相談に来るし、直して欲しいと思う。」と言うことは、あります。そのときも、確かに「**専門家**」という言葉を使います。相談する側から見れば、それは当然のことです。

自分の側から考えると、それは自戒の言葉です。自戒の言葉として、自分は『**専門家と呼ばれる**』ような知識・技術を身につけているか、そして自分自身で自分を『**専門家と呼べる**』ような自己研鑽を積んでいるかを反省しなければと、少々厳粛な気持ちになりました。「**呼ばれるように**」と書いてくださった先生に感謝。

たぶん無自覚に、この言葉を書いたのでしょう。でも、この言葉を書いた先生の中には、素地として、普段から相談にみえる親御さんに対する謙虚な気持ちがあるのでしょうか。そのような姿勢が「**呼ばれるように**」という言葉を生んだものと思うのです。

『**専門家と呼ばれるように**』、何だか深くて、とっても**いいことば**に感じます。

S Tとして働き始めて6年になりますが、今まで成人対象のRHしか行ってきませんでした。

職場が変わり、小児領域も担当することになり、現在、中学生の吃音の女の子を担当しています。

改めて、先生のお話を聞いて、子どもとの関わり方など勉強することができ、私にとってとても良い機会になりました。

今後の臨床に生かしていけるよう、活用させていただきたいと思いました。

吃音に対する効果的な具体的指導を身につけたくて参加をしましたが、本当にガ〜ン!!
といった感じでした。

まずは、吃のことをしっかりと知ることの重要性や子どもの吃症状は「氷山の一角」であることなど、吃を治すことだけに気をとられていた自分の浅はかさに気づかされました。

ICFの考え方についても勉強不足であり、あらためて子ども像のとらえ直しを帰ってからすぐにしようと思っています。

自分では、子どもとの関係性は悪くないと思っていましたが、子ども目線で見直してみます。

親への説明責任のことも含めて、やることが少しみえてきたように思います。

つい症状ばかりに注目してしまい、その軽減ということばかりを考えていました。そのお子さん全体を見て理解しなければアプローチできないことがたくさんあると感じました。とても意味のある2日間でした。

長澤先生のお話をお聞きするのは3回目ですが、「保護者への」ということでかえってよかったと思いました。

「その子が20%に入るのかそうでないのかは誰も分からない。しかし、やることはたくさんある。」という言葉が勇気をくださった気がしました。

小林先生の実際の指導の様子を含め、方法等大変参考になりました。小林先生の話方も前回と少し違い、吃音の軽減コントロールの実践のようで勉強になりました。具体的指導、キャンプの様子等、次回はお聞きしたいと思いました。

川合先生の講義大変良かったです。理論的な内容として、自分の臨床内容確認+必要な(忘れていたこと)ことを教えていただけました。

職場に戻り、整理して取り組んでいきたいと思います。

吃音指導について、本を読んだだけでは分からないことをたくさん教えていただいて、大変ありがたかったです。

保護者や学級担任の先生へ環境調整について話したり、子どもの気持ちを開放することはできましたが、子どもの吃音に対し直接指導することは、全くできませんでした。そのことを申し訳なく思っていたので、今回の研修でやるべきことが見えてきて、感謝の気持ちでいっぱいです。

まだ「こういうこともあるんだ」という状態なので自分で研修していきたいと思っています。

僕は、まだ吃音の方を担当したことがないのですが、担当することになった場合のことを考え、今回参加させて頂きました。

今回、研修を受け、吃音の難しさや深刻さ、また、関わる指導者の責任について感じました。そして、今後さらに自分自身、勉強や練習することが大切だと思いました。

とてもすごい心がけだと思います。通常学級で言えば、吃音のある子の指導や構音に誤りのある子の指導、口唇口蓋裂があったことによる構音障害の指導、難聴のある子の指導、上手く人と関われない子の指導等々は、ちょっと？ かなり？ 詭弁なのですが、国語、算数、理科、……に相当するものだと思っています。自分は、算数が苦手だから、自分の学級では算数の指導はできないし、従って、しないなどということがまかり通るわけがない。

同様に、側音化構音の指導なんて、指導が難しいし（本当は簡単！）、それほどコミュニケーション上支障がないようであれば、治して欲しいと来室してきた相談者には、「それほど目立たないし、気にならないよ」と自分の価値観を押し付け、相談終了とするなんていうことが、まかり通るはずはない。

このようなことを書くということは、……。 （想像にお任せします）

ことばの教室関係のセクションを担当していれば、必ずいつかは、吃音のある子の指導を行うことになりますから、予め勉強をしておくことは、本当に大切なことなのです。

避けて通ろうとしない姿勢、見習いたいものです。

それから、せっかく長澤先生始め3人の先生方のお話をお聞きしたわけですから、吃音のある子の指導のみの視点ではなく、今回のお話を、人と上手く関わりとり難い子の指導だったらどうだろう？ 緘黙の子の指導ではどうだろう？ と考えてみてはいかがでしょうか。吃音そのものへの指導内容や方法は、吃音のある子の指導でしか考えられませんが、それ以外の子どもの見方や方法論は、他の問題で来室するお子さんの指導へも十分生かせるお話だったと思うのです。

今回の講座には、特別支援学校（知的障害）の方も参加していました。今現在関わっている子（吃音のない子）の指導という点からも勉強になったとのことでした。

「共調同時音読法」ですが、これができるようになると、構音指導がとても楽になります。また、補聴効果のギリギリの難聴のあるお子さんと話をするとき、その子の発語をよく聞き、合わせるように言葉をかけてあげると、少なくともそうしてくれる先生の話は聞き取り易いなどという現象が起きます。

ですから、指導は吃音のある子への指導の方法、指導は、～の問題のある子への指導と狭く考えるのではなく、今回吃音指導講座で学んだ、子どもの見方や問題の見方、問題の理解の仕方、指導のあり方等々を、今日の前にいる子に生かすことを考えてくだされば、やがて出会うであろう吃音のある子への指導だけでなく、今日の前にいる子の指導にも直接役に立つと思うのです。いや、役立つはずです。

だいぶ以前になります。ある県から参観にいらした先生に「1日15校時（1校時；45分指導、午後9時前後が勤務終了の時刻）設定での指導時間をとってもまだ通級指導ができない子が多くいたので、『発音に誤りのある子の母親教室』を開いていたことがある。」と話したところ、「『母親教室』って、吃音の指導じゃないんですか？」と啞然としていました。その先生は、発音の誤りのことで来ている母親に吃音の話をしていると考えたの

でしょう。私はというと、啞然としている先生を見て啞然としました。このような硬直した指導観や指導法で、どうして様々な問題を抱える子どもや親に向き合えるのでしょうか。背筋がゾツとしたことを今でも覚えています。

話は違いますが、『1日15校時』を許していた学校長って、すごいと思いませんか？在職中は、千葉でお一人、山形でお一人で、二人の校長と出会っています。山形での校長は、「午後10時までには学校の電気消せよ。時々家から見に来てんだぞ、君が帰ったか。ゆっくり酒飲ませろ。」と笑顔で言うのでした。

私は、知的障害の特別支援学校に勤務しています。普段、吃音のある子どもと接する機会はないのですが、昔自分も吃音があったということもあり、興味を持ち、参加しました。

「育む指導」「子どもの理解」「将来の人生設計の構築」など、障害にかかわらず、考えていかなければならないことは同じだなと感じたところです。指導（支援）方法や指導（支援）内容は違えども、教師の考え方や心構えなど共通する部分がたくさんありました。そして、その大切さを改めて感じました。

自分の担任している子どもを見つめ直すいい機会になりました。

吃音で通級してきている子どもはいないのですが、他の子どもと音読するときに、合わせてみようと思います。

通級指導の対象で、吃音のある子の指導以外で音読指導の必要な子って？ ちょっと想像が付きません。

ずっとお聞きしたかった先生方のお話をお聞きすることができて、遠くまで来てよかったと思いました。これまで自分がやってきたことをまとめ、見直して、子どもや保護者に返せるものを少しでも増やしていけたらと思っています。

今年から通級している小6女兒の吃音のある子への指導について 少し見通しが持てました。情動の変化が激しく、家庭、学校、友人、スポ少などいずれの場面でも不満足感があり、全て母親のせいと考えている子です。小さな規模の学校で 幼児期から同じ人間の集団の中で育ってきたこともあり、固定化された人間関係の中で、思春期の敏感さもあり、本人がとってもイライラしています。

長澤先生のお話、小林先生のお話、川合先生のお話、いずれも 吃のある子に対して自分なりの理念や指導観をしっかり持っていく根拠が少々わかってきました。

音読については、一番初めにモデルをしっかり示していただけると より 自分のものにできたかなと思います。先に参加者の中で モデルをしてもいい人にロールプレイをしてもらったものを梅村先生に評価していただいたり、ポイントを整理していただいたりできると、イメージを持って 自分で考えながら 演習できたと思います。

川合先生のお話は、初めてお聞きしました。とっても分かりやすいお話でした。お話の軸がぶれずにスーッとわかった（ような気がしているのは危険なのですが...）かな？

あすからの吃音をもつ子どもの通級指導時間が苦痛でなくなるように、よく咀嚼していきます。参考書（手ががりとなる本）について、その本を読むだけでは伝わりにくい部分を説明していただいたのが よかったです。

夏休みでない時期でありがたいです。夏休みは研修や免許更新講習もあり、クタクタになりそうです。

形式的なモデル（見た目でのモデル）は、音読指導している方ならば、もうすでにイメージはあるわけですから、何のモデルなのでしょう？ 「共調同時音読」は、「形」は一般に行われている「音読」そのものです。ですから、観る視点があればモデルとしての意味合いが生まれてくるでしょうが、『子どもに合わせる』こと自体自由にできない状態の方が見ても、ただ一緒に読んでいるようにしか見えません。先生にはその視点はおありですか？ そして、『子どもに合わせる』ことが自由にできるようになったのであれば、その時には、モデルはもう必要ないのです。もうできるのですから。

一般的にも実技研修は、「自分で考えて」できるようなものではありません。なぜなら自己評価の観点がないからです。実技研修は、自己評価の観点を作り上げていくプロセスなのです。自己評価の観点を作り上げていくためにも、他者評価を**さんざん**受けなければならぬのです。

従って、先生が言われるように「モデルをしてもいい人にロールプレイをしてもらって、梅村に評価をしてもらってポイントを整理した話を聞いた」としても、「イメージを持って、自分で考えながら演習できた」とは全く思えません。再度繰り返しますが、体験なくして「整理した話を聞いて」も理解できますか？ 自己評価もできない、『子どもに合わせる』こともできない状態での「イメージを持つ」ってどんなイメージなのでしょう？ そのイメージは当たっているの？ そのイメージで良いと誰が判断するの？ 「自分で考えて」って、その考えは正しいの？ 正しいかどうか誰が判断するの？ 自分で？ 先生には判断する基準はあるの？

つまり、ある程度できるようになって、そして、自己評価の観点を持てるようになって初めて「自分で考えて」練習ができるようになるのです。それでも実は、難しいのです。

実は前日の夕方から、グループ指導者になる先生方が集まって、「共調同時音読」の点検として読み合わせてみました。「えー、合わない！」「また、ずれた。」と明日に備えて練習しました。「ちょっと練習しないと、すぐ出来なくなるね。」と確認しました。実技というものは、そういうものだと思います。何年やってもです。

実技研修が終わってから、「モデルがあればいい」とお考えになったと思うのですが、次回参加されるときには、「自分がモデルになりますから」と手を上げて下さい。このような意見を述べたからには、評論家でない限り、義務が生じるのです。そして、「他の人がするのは見たいけど、自分が前に出るのは嫌」は、許されないのですよ。

それから、たぶん先生より私のほうが経験は、長いと思います。だとすれば、「モデルをしっかりと…」などと考える前に、「どうしてモデルを示してくれないのだろう？ 何か特別な理由でもあるのだろうか？ その特別な理由って何だろう？」とはどうして考えないのでしょうか。さらに言うならば、「モデルがあった方が良く思うが、モデルを示さなかったのは、～（自分の考えを述べる）～だからでしょうか？」と質問していただければ、もっといいのですが。

ところで先生は、「共調同時音読」が出来るようになったのでしょうか？ 出来ないのはモデルがなかったせいなのでしょう。

先生は、前向きに、モデルがあればそれに基づいて、限られた時間でもっと練習ができたのにとの思いから、ご意見をくださったものと、勿論理解はしています。

指導技術は、どれひとつをとってみても、そう簡単に習得できるものではないのです。これもよく言われることですが、『簡単そうに見えるものほど、難しい』のです。

今回の実技研修で、先に進めることが出来ると思えるのは、最後にモデルとして登場していただいた先生だけでした。約75%の先生方の声は、私の耳で点検しました。あとは、グループ指導者から「共調同時音読」が出来ているという報告はありませんでしたから。

モデルといえば、最後に川合先生から登場していただき、H-DAFを掛け、DAF時の読みにくさ、そしてその後の「共調同時音読」での『安心感』を体験してもらいました。

H-DAFをご覧になった皆様にお願ひです。絶対に、真似はしないで下さい。もっと言葉が出にくくなる可能性がありますから。

先生役の先生の読み方を聞いていると、子どもに合わせるつもりで、実は自分の読みになっていることに**気がつかないで読んでいる**ことに気がつきました。

これは、通常学級を経験された先生方の場合、斉読といえば、自分の読み子どもを合わせさせることを多く経験してきているからかなと思います。また、これまで、音読指導を行ってきた先生の場合も、自分に合わせさせる音読を行ってきければ、同様に、自分の読み方に気づきにくいかもしれません。これを修正するには、自分では気づかないのですから、**瞬時瞬時に徹底して嫌気がさすほどの指摘**を受けること以外に、「子どもに**合わせて読めるように**」はならないないと思います。

「子ども**に合わせて読む**」という経験がないのですから、イメージの持ちようがありませんし、自分で気づかないのですから「考え」ようもありませんから。

『子ども**に合わせて読む**』ことができるようになってから先、どのように応用して指導に使えるようにするかは、指導段階に合わせたモデルを示したいとは思っています。

吃音は、いろんな意味で、良くすることは簡単ではありません。でも、悪くするのは簡単です。成人の女性の相談がありました。条件は、音読するのであれば、相談に行かなくともいいというものでした。以前ことばの教室に行っていたことがあるとのこと、よほど音読では嫌な経験をしたのでしょうか。ことばの教室では一緒にだとももらないで読めるのに学級ではどもるといふのを何年も経験したようです。ことばの教室で、他にしたことは覚えていないとのこと。当然、ことばの教室で音読以外のことをしなかったはずはありません。でも、記憶に残っているのは、音読、それも嫌な記憶として。

モデルを先に示さない理由は、モデルを示しても何の役にもたないことの他に、もう一つあります。藁をも掴みたい一心で研修会に参加されている方の場合、『形』が示されると、それを真似したいとの欲求に囚われます。そして、できるようになった錯覚に陥ります。「形」だけ真似されても、迷惑をこうむるのは子どもなのです。

ここまで、同じ内容のことを何度も繰り返し、しつこい、今風に言うと、うざいと感じられた方もいらっしゃると思います。なぜこうまでも繰り返さなければならなかったのかは、お考え下さい。

この講座で、先に進めるように**なれば**いいが...とも思っていますが...。どのようなプログラムが良いのか、良いアイデアがあれば教えて下さい。

2日続きの内容のある講座でした。実際に共調同時音読法をやってみることで難しさもそうですが、聞くこと、見ることの大切なこと、教えていただきました。

きちんとしたダメ出しもよかったです。スキルを手に入れるのは、簡単じゃないのだから努力しなくてはだめということを実感しました。

このように二日間吃音だけについて学べる機会はめったになく貴重な二日間でした。先生方のお話をお聞きして、子どもと、吃音についてもっと深く話し合えるような思いになっています。

同時音読についてはまだまだですが、効果を与えることができるように努力したいです。

ことばの教室の担当3年目で、初めて吃音を持つ児童を担当することになりました。本などで勉強することはできても、実際の指導や最新の指導について知らないことが多く、今回の講座は、とても学ぶことが多かったです。

子どもに合わせて読む、それについてはもっと練習が必要だと感じました。学んだことを子どもに生かせるように、さらに勉強していきたいと思います。

スタッフのみなさん、お疲れ様でした。

とんでもありません。前向きな感想に出会っただけで、やっぱりやって良かったなと思います。

「吃音を持つ」という表現、どうなのでしょう？ 「持病を持つ」なんていう言い方しますが、それと同じことなのでしょうが、吃音は？

吃音研究で有名な方々の講義を受けることができ、ありがたかったです。

小林先生の本を見つけ、このような本があると良かったと以前購入し読んでみましたが、ご本人から直接教えていただける機会を得られ、読むだけではわからない部分がおぎなえ、また、これからの指導の力とすることができました。

吃音の子、1～4年生5名を担当していますが、どこからどのように指導を進めていくか（これまでの指導を振り返るといろいろ抜けていて反省しきりです。）、もう一度考え直さなければと痛感しました。

会費、安いと感じました。

講義の時間は予定通り進めて欲しい。汽車の時間があるので。

会費を安いと感じていただきありがとうございます。でも、これは、講師の先生方が、一般では考えられない謝金で臨んで下さったからなのです。7月下旬に3人の講師の先生方とお会いしますので、先生の声を講師の先生方にお伝えするとともに、改めてお礼を述べたいと思っています。

長澤先生の講義は、吃音の基礎となるもので、自分自身再確認する意味で とても良かったです。また、小林先生の 講義も 最近の知見について わかりやすく 話していただき、良かったです。

進行面でやや雑な ところが気になります。

受付は 長い列をつくっているのに 10分間しか設定していなかったり、1日目

20分以上 予定が ずれこむのは、様々な諸事情は わかりますが 全国に呼びかけている講習会としては あまり いただけません。

進行面に対するご意見、よく分かります。早速の解決策として、言語発達障害研究会の案内が届いているかと思いますが、予め、時刻の後に『頃』を入れてみました。

尚、言語発達障害研究会（会長；長澤泰子先生）に参加されてみると分かるのですが、当日の日程では、『おおよその日程』としてあります。これ、どういうことかお分かりになりますでしょうか？

今後、案内を作成する際は、研修の価値を下げないために、『おおよその日程』として時間提示をしていきたいと思います。

ついでに、長澤先生の講演後の様子をお伝えしたいと思います。

長澤先生が廊下に出られたのに続き、保護者さんたちも廊下に出ました。そして、列を作って相談をされていました。長澤先生のことですから、お一方お一方の相談に丁寧に耳を傾けられ、適切なアドバイスをされたのだと思います。立ってのお話でしたので、1時間を過ぎた頃、椅子を出しました。そのことが災い？（親にとっては幸いにも）してか、約2時間もの間保護者の相談に対応しておられました。もっと早いタイミングで椅子をご用意しても変わることはなかったなあと同時に、30年もお付き合いさせていただいているのに、「まだまだ長澤を分かっていない」自分に気づいたのでした。

涙をポロポロ流しながら聞き入っていた保護者、一言も聞き漏らすまいと真剣に耳を傾け聞き入る保護者に、講演中に出会い、途中からは、保護者に対して語りかけていたと感じたのは、私だけでしょうか。だから、……………なんて、長澤先生に決して言えません。

初めてこの研修会に参加させてもらって（以前から同じ職場で行きたいと話していた人にも伝えられると思っていたので）有意義な2日間を過ごすことができました。

梅村先生の辛口なお話に最初は背すじがピンとなる気持ちでしたが、少しきついなあと感じました。

確かにことばの教室を担当して、その子の問題が解決できなければ担当者として失格、やめた方が良いというのわかりますが、なかなか難しくできないこともあると思うのです。叱咤激励している、よかれと思って言ってくれているのはわかるのですが、若い方や初めて参加する者にとっては、もう少し柔らかい言い方で話してもらえたらと思います。

小林先生の本は4月に購入して参考にさせてもらっていたので実際に本についての詳しい説明があって大変ありがたかったです。

川合先生のお話は、再度吃音の基礎と臨床についておさらいさせてもらって、確かめるよい機会になりました。

ことばの教室担当者として このような研修会に参加することは、とても貴重なことなので、是非今後も企画してほしいと思います。

先生は、どちらの方を向いて物事を考えるのでしょうか？ 「親？」とれとも「先生？」。ことばの教室を訪れる親は、どんな『想い』で来室されるのでしょうか？

『子を想う親の気持ち』を想像できないのでしょうか？

「ことばの教室を担当して、その子の問題が解決できなければ担当者として失格、やめた方が良い」というのは、相談者側からの考えです。言い方を変えようが変えまいが、怖い内容です。怖い内容を優しく柔らかく表現したら、もっともって恐ろしくなりませんか。もっとも、怖い内容を優しく柔らかく表現されて背筋がゾクッとしなかったら、それこそどうしようもないのですが。ですから、激励するつもりなんてさらさらありません。

でも、この辺のことをキチンと受け止めてくれている感想もあるのですよ。

想像ですが、たぶん先生自身がこの言葉の意味を頭では理解されているのでしょうか、心情的に理解されていないか、もしくは心情的に受け入れがたいものを感じていらっしゃるの。「もう少し柔らかい…」との表現になってしまったのかな、と受け止めています。

先生にとって、この言葉は卒業できたのですか？ 若い方や初めての参加者への配慮を求めることができるほど、先生の心情には響いていなかったのでしょうか。残念です。

ご自分が、どこかに相談に行くことを考えてみて下さい。医者でもいいです。よもや、まさか相談先の先生が、養成も受けてない、知識もない、技術もない状態でそこにいるとは、努々考えないでしょう。ことばの教室を訪れる親にしても事情は全く同じですよ。

でも現実はどうですか？ 先生のいらっしゃる県は、ことばの教室を担当する先生に対し、担当したときに相談や指導に支障がないようにと、ある程度の知識、ある程度の技術を身につけさせてから担当させているのですか？ そうではないでしょう。

ですから、先の言葉は、本来なら先輩の先生が新任者に対して、しっかりと厳しく伝えなければならない言葉なのです。背筋がゾクッとするくらいがちょうどいい、いやゾクッとしてもらわなければ困るのです。親の側からすればです。

私はというと、昭和45年(1970年)4月、新卒と同時にことばの教室を担当しました。教室研修で言われてゾツとし、あっちの研修会で言われてゾツとし、こっちの研修会で言われてゾツとし、そっちの研修会で言われてゾツとする有様でした。さらには、原価計算と称して、月額給料が4万円(初任給・税他全て込み)なら、月20校時指導するとして一校時につき2千円(当時の2千円の価値=2次会まで飲める金額)と計算され、「あなたは、2千円に見合った指導をそれぞれの子にしていますか？」と問われ、返事に窮し、自信を持って「やってます！」と言えない自分が情けなくなったり、そんな状態でした。

ある先生に、原価計算をして「先生は、この金額に見合った指導をしていますか」と問うたところ、「僕は、この子の指導だけじゃなく、学校の仕事としては～～、PTAの仕事としては～～、 の仕事としては～～。」と返され、「この先生ことばの教室を早く辞めてくれ」と密かに思ったのでした。教師としての倫理観の欠如だとは思いませんか？

「ことばの教室を担当して、その子の問題が解決できなければ担当者として失格、やめた方が良い」は、誰への言葉でもない、経験40年目の自分自身への言葉なのです。

だから、今回のような研修会を、時々開催させていただいているのです。

「知識も技能もないことがわかっていて校長は担当させた」「研修に行かせてくれない」「研修する機会がない・教えてくれる人がいない」「研修会があったら・企画してくれれば、参加する」は、親には通用しません。指導ができないことの原因にもなりません。

ちなみに、順番に「くれない族」「ないない族」「たれば族」と内々申ししていますが、特に「くれない族」なんてカッコいいなんて憧れないようにと戒めています。

自分は、**何族？** 該当するものはないと、胸を張って言いたいものです。

親にとっては、初心者もベテランもないのです。ただただ自分の子どもにとってプラスになってくれることをしてくれれば、それで良いのです。違いますか？

吃音のある子どもの指導を どのように進めればよいか困っていたところだったので、参加しました。「実技研修」がセットになっていたのが、特に魅力でした。

期待どおりではなく、期待をはるかに超えた内容で、充実した二日間でした。

中でも一番良かったのは、一日目の実技研修で、梅村先生から「今、何をやっているのですか？」「何のためにやっているのか？」と指摘されて、「形」だけを「なんとなく」やっていることに気づかされたことです。

吃音のある子の理解の仕方から指導法まで、まだまだまだまだ知らないことがいっぱいありました。“吃音のある子にできることはいっぱいある”という長澤先生のことばが身にしみました。

苦手意識はなかなかふっしょくできませんが、その子に少しでも何かできるようにがんばりたいです。

3回目があったら やはり参加したいです。

山形の先生は うらやましいと言われましたが、それが本当になるようにしたいです。

他の方の感想等は、できるだけ地区も分からないように努めているのですが、これは、決意表明ですので、出させていただきます。感想を出して下さいました方、いいですね。

「スラスラ話せるようになればよい」「せめてつまったりする回数が少なくなればよい」「音読や話し方の練習をすればよい」など、吃音氷山の一角にしか目を向けていなかったことを実感させられた。

3日（土）の梅村先生のお話では、指導者としての条件や自分なりの指導理念を持つことの重要性について痛感させられた。中でも吃音は子どもの全身を見て、一つ一つの細かい部分まで着目していかなければならないことを教えられたので、早速明日からの実践につなげていきたいと思った。

3日（土）、4日（日）の小林先生のお話は、ご自身も吃音ということでしたが、一つ一つのお話が当事者ということもあり、伝わってきたように感じました。私たちが言える立場ではないのですが今後もいろいろな所でお話を聞かせていただきたいと思いました。

4日（日）の川合先生のお話は様々な支援があることが分かり自分の指導に活用していければと思いました。

いいえ「言える立場」ですよ。「小林先生のお話を、何が何でも聞きたい」その気概だけで充分「言える立場」だと思います。「いろいろな所」は、先生の所でもいいのですよ。

今回の話を伺っただけで、話に出てきた指導ができるようになるはずはないでしょう？

「こんな研修会があったら参加したい」（先生は「**たられば族**」？）などという後ろ向き、研修に消極的な先生を親は許しません。先生が参加したい、勉強したい内容の研修会を先生が開催すればいいんです。

先生が音頭を取って、「小林先生の話聞く会」をやりたいからこの指止まれとやればいいんです。誰もいなかったら、先生一人でやればいいんです。当日、受付など手伝ってくれる方が数人いればいいんです。別に公の講習会をしようという訳ではないのですから。

吃音のある子の指導は、指導の方向、指導の内容、指導の方法、どれ一つとっても研修したいと思っている方は必ずいるはずで

ご自分の地区だけでやろうとすると、参加費を10万円にしなければ開催できないなと思えば県全体に案内を出そう、県内の先生方が全員参加したとしても、参加費が5万円になりそうだったら近県に案内を出そう、それで参加費が1万円にまで下がる見通しがついてもなお高いかなと思えるのであれば、全国に出そうと考えればいいんです。

基本は、自分が「知りたいのか、知りたくないのか」、ただそれだけです。

私達が今回この研修会を計画したのは、研修会の最後にも述べましたが、私達自身知りたいことがいっぱいあったからです。

その気概と熱意で、長澤先生、小林先生、川合先生に当たってご覧下さい。必ず応えてくださるはずで

それに、上手く進行しようなんて考えなくていいんですよ。初めは一人なんですから。

『想い』に裏打ちされた研修会ですから、「私、話す人。あなた、聞く人」なんていう姿勢で3人の先生方が話されるはずはありません。ですから、聞き手次第、熱意を感じれば講義は当然伸びるでしょう。ですが、ここは、先生の『想い』で開催している会なわけですから、そして、先生のその『想い』を感じ取れるのがことばの教室の先生ですから、長澤先生の講義が30分伸びたら30分多く勉強できた、小林先生の講義が20分伸びたら20分多く勉強できたと喜んでくれるはずで

そこが私的な研修会の良さなんです。どんな研修会？と上から目線で評価しに来るなら別ですが、研修に飢えている先生なら、その良さが分からないはずはないと思いますよ。

是非、実行して下さい。受付でも机並べでもなんでもお手伝いに上がります。声をかけて下さい。

今年からことばの教室の担当になりました。正直なところ、引継ぎが上手く行なわれず、吃音についての勉強も、児童についても分からない状態でスタートしました。手当たり次第本を読んで勉強してきましたが、きちんと講座を受けて勉強したいと思い参加しました。

勉強させていただくと、とても濃い内容の2日間でした。

実践を通して、現場でも活用していけたらと思う音読方法も学べたので、もっと練習を積んで児童とのかかわりの中で生かしていきたいです。

また、小林先生の講義では、ご自身の経験も交えた話を聞くことができ、とても参考になりました。

「手当たり次第本を読んで」というフレーズ、久しぶりに聞く言葉です。ただ、今回参加された先生方の感想から、同様の先生方が沢山いらっしゃることを強く感じています。先生のように前向きに取り組んで下さる先生を親は待っていると思います。

実技講習から始まり、長澤先生の公開講座、小林先生の講義、川合先生の講義、実技研
遠くから思い切って参加して本当に良かったです。

明日からの指導に役立てたいと思います。

以前2年間ことばの教室を担当し、9年ぶりに、再び、担当となりました。初めて担当
した時は、3教室あり、困った時は、すぐ、相談できたのですが、今回は、教室が1つ（
今は、どこでもそうだと思うのですが）、そして、側音、歯間音、置き換え、唇歯音、吃
音、それらの混ざり合っている（幸いなことに、今年度からAD/H D等の通級教室が設
置されたので、構音指導だけですが）というように、いろいろな児童が通級しています。
前担当の先生に来ていただいたり、本や資料を読んだり、毎日試行しながら7月を迎えて
しまったという思いです。

なかでも吃音の指導が初めてでしたので、4月に書店で小林先生の本を手に入れ、「う
さきち、かめきち」（3年生の男子だったので名前を勝手に変えさせていただきました）
を、やってみたりしました。それは、3人の吃音児童の内、一人だけが「もっとやりたい」
と反応してくれました。やっぱり、一人ひとり実態が異なるように、指導・支援方法もそ
れぞれなんだと、再確認した次第でした。

3人吃音児童のうち、6年生の児童のことで悩んでいました。中学生になるに当たって
どんなことを、してあげられるのか。今回の講義で実践してみようと思うところがありま
した。さっそく理念を持ち、児童に寄りそって いこうと思います。

一番の収穫は、3日の午前中、吃音の状態が全身を見ないと分からないと分かった[？]こ
とです。ビデオで具体的に教えてもらったので、もぞもぞしているのことも吃音なのだ
と初めて知りました。

山形まで来たかいはありました。今度撮ったビデオで子どもの状態や表情を改めて見たい
と思います。特に楽に発語しているところを探すようにしたいと思います。

また、ICFにもつづく指導について述べた小林氏の本は、導入の目安と具体的な支援
内容がありますので、取り組みやすそうです。

昨日、保護者と一緒にアセスメントチェックシートをやりました。Qのところうまく
伝えられなくて、「それはどういうことだろう」と何回も質問されながらでしたが、指導
の見通しが持てそうです。

今日1日の参加になりましたが、1日だけの参加でも可にいただいたので、介護す
る身でも安心して聴講することができました。

念のため。「もぞもぞ」＝「吃音」とは限りません。子どもの普段のコミュニケーション
態度や話の内容、話し出すタイミング等々から判断しなければなりません。同じ動作で
も、随伴動作として動作の場合もありますし、表現を豊かにするための動作かもしれませ
ん。子どもの場合、一般的な随伴動作がないわけじゃないのですが、それを知ることより
も先生ご自身が体験を通して、自分なりの随伴動作の見分け方を構築されたほうが、役に
立つと思います。どもり方を把握したいと熱心になる余り、子どもの言葉に耳を傾けるこ
とを忘れることのなきよう留意して下さい。

吃音について歴史的なことも理解をしていくことは、安心して対応するためにとっても大事なんだと、今日来て改めて知りました。

自分の話し方（相手に伝えるためにどんな話し方をするとよいのか）をまず考えてみたいと思います。

自分の不得意なこと苦手なことをカミングアウトするには、とてもエネルギーのいることです（吃音にかかわらず）。その後、楽になるというのは本当だとわかります。

吃音は、話し方を治すことよりも、周りのかかわりや生活リズムや、大人の話し方を変えてみる必要があるのだな、と感じました。

日常的な対応のしかた、具体的で、大変わかりやすかったです。

実際に長澤先生の実践されている対応を直接教えていただくことが出来て大変参考になりました。

保護者から「どもりのことでいじめられないか心配」「治るでしょうか」「何か薬はありますか？」等質問をされることもあり、「治りたい」と思う保護者が多いように感じます。まずは吃音に対して正しい知識と対応を伝え、保護者と共に考えていきたいと思いました。

「治りたい」と思う保護者は、全員だと思いますよ。予め知識があれば別ですが。それだけに、ことばの教室が果たさなければならない役割は大きいのだと思います。

- 1) 音読指導に入るまでの対応（どんなことをやったか）と環境調整をどのようにやったかのかを教えて頂きたい。
- 2) 音読指導をこれまで何人くらい行い、何人くらい治ったのか、データを知りたい。学年が上がって、不安になって相談してきた人や再発、重症化した人なども何%くらいいましたか？
- 3) ブロックや随伴症状の強い人には、どのように入っていききましたか？
- 4) 成人にこの音読指導は、効果がありますか？

学会のような質問形式で…。質問しているにもかかわらず、お名前がないので本当にお知りになりたいのかは不明ですが、一応、お答えします。

2) への回答

音読指導だけで吃音の問題が解決するとは基本的に考えておりません。それに、先生が「治った」とする状態像が全く見えませんので、「音読指導をこれまで何人くらい行い、何人くらい治ったのか、云々」とのことですが、答えようがありません。

2) の前半部分の質問があるということは、先生は、2日目からの参加と思われます。

1日目の最初から参加していれば、絶対に出ない質問なので、資料をお読み頂きたい。

尚、この質問の場合、「治った」の定義が不可欠であることを付け加えておきます。

「学年が上がって、不安になって相談してきた人」は、います。通級していた子どもという意味での「学年が上がって再び」というお子さんは、今のところいません。

相談室を開設してから、今年で6年目、また、9～10年勤務した学校もあります。

再相談ということも今のところ経験していません。それが、良いかどうかは別問題ですよ。

最近では、高校でも音読があるとのこと、音読では特に緊張感があり顔が真っ赤、心臓がドキドキ、足はガタガタで、国語の教科担任にお願いして自分には当てないようしてもらっている子で卒業プレゼンテーションをしなければならないが、どもらないでプレゼンをしたいという高校3年生が来室しました。相談室から遙か遠く、高速道を使って往復3時間以上かかるが、必ず来るので何とかして欲しいとの本人と父親の訴えでした。

また、音読では心臓が飛び出るかと思えるほどの緊張感があり当てないようにしてもらいたいと父親が学校にお願いしたけど、国語の教科担任が1行（他の人の場合、3～4行を読ませるそうです）でも良いから読むようにと、多少譲歩はしてもらっただけという中学3年生も来室しました。どもらないで本が読めるようになるなら、部活を休んでも授業を抜けても来たいと並々ならぬ決意で来室したようです。でも、青春のシンボルである部活は休まないこと、授業も休まないことを条件に指導を承諾しました。従って、指導時間は夜8時から週1回45分としました。

高校3年生の場合、国語で、教師が約束を忘れてらしく音読が当たってしまったけど、平気で9行くらい読んだけど、どもりそうにはなったけど、他の人は気がつかなかったと思うと音読には自信を持ち、それ以降、前の約束はなかったことになったそうです。プレゼンとはいうと、緊張もなくどもらないで出来たとのこと、父親とお礼に見えました。ちなみにこの子の指導期間は、初回面接を入れて14回の通室（約3ヶ月間、基本週1回；1回の指導時間約45分）です。

中学生の場合、初回面接を入れて9回目の時、3週間ぶりに通室。本人曰く。「実は、僕は車酔いがひどく、ここに来るたびゲゲー吐きながら来ていた（乗ると思って車を見ただけで吐き気がしてくる状態）が、それを言うと断られると思い今まで黙っていました。先週、本読みが当たったけど、緊張しないで立てたし、他の人より長く（8～10行）読んだけど（どもらないので、先生が長く読ませたらしい）どもらなかった。ん？終わりの頃ちょっとどもったかなあ。でも他の人は気がつかなかったと思う。だから、今日で終わりにして下さい。」とのこと。この間実質2ヶ月。

二人とも、通室の目的は達成していますが、「吃音が治った」とは考えていません。念のため。

38年前のことになります。ある4月か5月の日曜日、ミシンのセールスマンが訪れました。新しいミシンがあるので必要ないと断りました。すぐに引き下がり帰ったと思ったのですが、すぐにチャイムが鳴り、ドアを開けてみると彼が立っていました。

彼曰く。「自分は、ミシンは売れなくてもいいんです。この仕事は吃音を治すためです。今まで言葉を使わないで済む仕事をしていたが、本当になりたいのは教師なんです。これではダメだと思い、言葉を使う仕事を始めたんです。ポストの名刺に言語治療教室（当時の名称）とあるのですが、成人は治してもらえないでしょうか？自分の姪にどもらないで絵本を読んで聞かせるようになれば、教員採用試験を受けようと思っています。」と話すのです。

次の日、主任の許可をもらい指導を始めました。主に（手作りの）機器を使用したDA

Fでの音読指導です。DAF速度は、0.22秒と0.44秒の遅延のどちらかで、体調や声の調子によって本人が設定することにしました。自分でも読みやすくなったのが決められた曜日と時刻にきちんとやってきては練習に励みました。

大学(2部)の夏休み、地元に戻り、姪に絵本を読んで聞かせたそうです。上手く読めたと喜んで報告をしてくれました。その後2回採用試験に臨みましたが失敗、諦めずに3回目に挑戦し合格、晴れて教員になったのです。彼の初任校が私と同じ市内の学校だったので逢ったことがあります。吃音はと言うと、決して音声言語的には治ってはいませんでした。

「治った」もそうですが、「再発、重症化した人」の概念がはっきりしないので、先生がどう受け止めるかはわかりませんが、「再発、重症化した人」は、今のところいません。終了の仕方が先生とは違うのかな?とは、先生の他の質問の仕方を考え合わせると考えられますが…。何を持って「再発、重症化した」というのかをはっきりさせて下さい。そうでないと噛み合わないと思いますよ。

吃音の指導(治療)の議論が噛み合わないことが多々あります。その一因に自分が用いている用語の定義を明確にしないことがあります。お互いになのですが…。

3) への回答

質問の意味(趣旨)が、正直わかりません。

ブロックや随伴症状の消去にかかわる指導は決して音読指導ではありませんので、ここでは一応、あくまでも「音読指導上で」と理解しておきます。

ブロックや随伴症状は、強い弱いにかかわらず、元来初めの音さえ出せば何ら生起するものではないわけですから、基本的には、ブロックや随伴症状への特段の配慮は必要ありません。1日目の指導ビデオでご覧いただいたとおりです。ブロックや随伴症状があるからというわけではなく、『共調同時音読』の基本として、第一声時にブロックが生起しないように、タイミングと読み手の声に合わせて集中するだけです。それがそう簡単にできないので、今回の実技研修を設定したのです。どうです、できるようになりましたか?

もし一緒に読もうとして、弱かろうが強かろうがブロックや随伴症状が生起したとすれば、強いブロックや随伴症状だから生起したのではなく、指導者の読み方(合わせ方)に問題があると言うだけのことです。くれぐれもブロックや随伴症状のせいにはしないように! ブロックや随伴症状が気の毒です。ブロックや随伴症状に責任はないのです。

あくまでも「音読指導上」ですが、ブロックや随伴症状の派手さには一喜一憂しないことです。指導の全体像の中では、派手なブロックや随伴症状から来る『困り感』や『恥ずかしさ』等々には、充分配慮することが必要です。配慮の仕方については、質問の趣旨ではないようなので、その詳細は省略します。

それから、予期不安や語への恐れの方への導入では、「音読指導上」音読する文章の選定には十分な配慮が必要です。でもこれもまた質問の趣旨ではないようなので、その詳細は省略します。

4) への回答

成人にも、この音読指導は、やりようによっては、とーっても効果があります。

1) への回答

吃音のことが少しでも分かる方ならば、音読指導と一言と言っても、読み手の年齢、性格、吃音での困り感、内省力、知的能力、治す意欲（良い意味でも悪い意味でも）等々が絡んできますから、『音読指導に入るまでの対応』というテーマでおそらく実技研修（音読ではないですよ）を含めると、毎日8時間の研修時間として、1ヶ月くらいはかかる内容のことの質問であることが分かると思います。なぜなら、『音読指導に入るまで』ということは、音読させようとしている子（成人）の理解がある程度成立していなければなりませんし、音読指導が必要と判断するに足る情報の収集や面接を行わなければなりません。つまり、目の前の対象者の指導の全体像をある程度つかむ必要があります。それが、『音読指導に入るまで』に行わなければならないことです。ここまでは大丈夫ですか？それに、一般論としての対応を聞いても、先生自身ができるようになれば何の意味もないので実習も必要でしょうから、どうしてもそのくらいの日数と時間が必要かもしれませんし、場合によっては、それ以上の時間が必要かもしれません。

質問が、**音読指導に限っての『音読指導に入るまでの対応』**という意味ならば、今回の実技研修で行った『共調同時音読』ができないならば、回答する意味がありません。なぜなら、『先生がされている音読指導』と「共調同時音読」が異なるならば、実行する際の留意事項が変わってくるからです。ですから、先生が普段行っている『音読指導』がどんなものであるかを説明して下さると少しは回答ができたかもしれません。ダメ押しになるかもしれませんが、仮に「共調同時音読」を前提にした『音読指導に入るまでの対応』を回答したとします。でも、それを『先生がおやりの音読指導に入るまでの対応』にされた場合、当然基本的な音読指導の考え方・方法が異なるわけですから、もしかして上手くいかず、先生のご心配のブロックや随伴動作をさらに強化しないとも限らないのです。その懸念がある限りは、最も一般的な先のような回答しかできなのです。ご了解下さい。

もしかして、この質問は、私をテストするための質問.....？

「どんなことをやったか」（ずいぶん失礼な質問の仕方と感じつつも）、**百人百様のことを**やりました。「どんなこと」の具体的な内容は、私に1日8時間3日間くだされば、さわりくらいはお話できると思います。

「1日目の指導ビデオで見せていただいた さんの指導では、音読指導に入るまでどのように対応されたのですか？」という質問ならば、その子についてのみ話せばよいわけですから回答の仕様があります。

「環境調整をどのようにやったのか」についても、吃音のことが少しでも分かる方ならば.....、以下同文です。

ちなみに、先に紹介した2人の中高生の場合、通室目的がかなり狭いので特に「環境調整」は全く行っておりません。でも、音読指導のみを行った訳でもありません。

行動療法の逆制止理論に基づく系統的脱感作を開発したウォルピー先生は、不安や恐怖への逆制止の状況（場面）として、筋弛緩訓練・催眠や自律訓練によるトランス・性的興奮などを列挙していますが、私が特に注目したのは、「落ち着いた空間的・物理的室内環境・心地よい椅子そして安心感を与える指導者（治療者）の雰囲気」が逆制止の環境を作り、「その中で行われる不安場面の会話（話をするためには、不安場面の想起が不可欠）

でも脱感作が生じる」との知見です。

読み手とは、大人であれ子どもであれ、苦手な音読場面の話はするわけですから、当然その会話場面で脱感作が生起するような配慮は充分するわけです。ですから、ただ単に、どもらないで読めたと言うことだけが音読への自信になったとは考えられないわけです。

系統的脱感作及び音読指導を中心にまとめた小学5年生の事例（梅村執筆）が、「言語障害児教育の実際シリーズ どもり 日本言語障害児教育研究会・山岸次郎編 日本文化科学社 1982」に載っていますので、かなり古いのですがご参照下さい。

幼児から小学2年生の場合（厳密には自我形成の状況によっては）、トランシーバーによる親への指導を行っています。具体的には、親にトランシーバーを着けて子どもと遊んでもらい、モニター室から「～ちゃんの今の笑顔、いいね。一緒に笑おうよ」とか「もうすこしゆっくり目のほうが、安心して（子どもは）答えられるよ」のようにリアルタイムでダイレクトに指導するものです。

吃音のある子の場合、もちろん行動に自信を持たせるような遊びでのかかわり方、自律していけるようなかかわり方、自尊感情や有能感、有要感にかかわるような言葉の掛け方や褒め方等々のサゼッションもトランシーバーを通して行いますが、加えて、目の前で生じている吃の状態の解説、親の話し方（子どもに見合ったスピード・声の高低・抑揚等々のコントロールや会話の仕方（ブロックで言葉が出にくい時どの時点で初めの言葉を書いてあげるか・簡単に答えられる質問の仕方・相槌の打ち方・「うんうん、そうそう」返事の禁止・インリアルで言うところの言語心理学的技法に相当する対応・等々）へのサゼッションも行います。

1年生の女の子のお母さんなのですが、「先生！ 私の喋り方で子どもがどもることがあるって分かった。」と言うのです。「うっかり自分の声（発語）のコントロールを忘れて喋っていたら、だんだんどもりが目立ってきたんで、教えられたみたい（子どもの話すリズムに合うように、どもらないで喋っている子どもの声に合うように）に急いで戻したら子どもも落ち着いてきて、どるのも減ってきたんです。」とのこと。

実は、このお母さん、子どもとはよく話をしているようなのですが、子どもが言い終わるか終わらない内に、自分の関心を引いた内容のときは子どもが話した内容について「そう」とか軽く「よかったね」程度の返事、関心がない内容のときは、自分で話題を移すなど、親に話をした実感を子どもが持ち得ないような会話の仕方なのでした。それに、早口になると声がだんだん上ずってきて裏声になることもありました。でもお母さんはそのことには気がついていませんでした。

こんなことから、これはお母さんの変化には時間がかかるぞ、と実は覚悟をしたのです。ところがです。親って子どものことになるとすっごいなあと改めて感じました。

トランシーバーを通しての指導1回目（通算指導2回目、内1回は、初回面接）

子どもとは、とりあえず遊べる母親です。まずは、お母さんの笑顔を「お母さんの笑顔で子どももニコニコだね。」と褒め、「うんうん。うーん。そう」返事の禁止、裏声の禁止、「子どものスピードに合わせてねー」を“ちりばめ”約20分、その後は、「あとは特に何も言いませんから、今までのことに少し気をつけて遊んでください。」と言いつつも良いところだけはフィードバック。そして、スタートして30分頃「気を使っているか

ら普段より疲れるでしょう。終わりにしましょうか？」と尋ねると「大丈夫」のサイン。そして40分で終了。家に帰ってから、どっと疲れが出たそうです。

トランシーバーを通しての指導2回目（通算指導3回目）

前回の指示を全てクリアー。裏声にならない。子どもの語調に応じている。「うん、すん」が無い。何より良いと思ったのが、話をするときに、目と目を合わせていることでした。思わず、「お母さん、頑張ったねー」「どおりで、どもるの減ってるねー」。

事実、減っていたのです。お母さんもそれは感じていたらしく、嬉しそうにニコニコしていました。

「子どもの発語に合わせる」ことが、いかに難しいかは、実技研修で体験されたと思います。でも、このお母さんは、1回の体験でできるようになってしまったのです。

勿論このようなお母さんは、そう沢山はいらっしゃいません。でもいらっしゃったわけですから、この指導法も、なかなかですよ、たぶん。

ちょうど1年間、13回の通室で指導が終了しました。終了のときにお母さんから通室しての感想を頂きましたの紹介します。

娘が3歳になる前から“どもり”があるなと感じていましたが、まだ小さいので幼稚園に入り、お友達と話すことで治ると思い様子を見ていました。

“どもり”がある時は「ゆっくりね」「 」と言うんだよ、言ってみて」と言い直させたりという接し方をしていました。

園の先生にお聞きしたところ、緊張すると目立ったり、相手に一生懸命伝えようとする時も目立ったりしますとの事。年長になっても状況が変わらなかったため、こちらの相談室を紹介され通うことに決めました。

親子のコミュニケーションを通しての指導ということで始めました。

40分程度娘と二人きりで遊んで話すということが最近なかったので不安な部分もありました。

いざ始めると、いつも“うん、うん”“それで”“忙しいから後で話して”という会話が多かったため何を話し、どう娘の話に言葉を返していいか悩みました。

しかし、トランシーバーを着けての直接指導の中で、「お母さん、ゆっくり話してみて」「 」という言葉で話して」などの具体的な内容で自分の中にすんなり入っていき、家に帰ってからも実際に生かすことができました。

子どもの話をしっかり聞く、子どもの言葉で話すことの大切さを学びました。子どもが変わるのではなく、親の方が変わることで、子どもは反応して変わってくれるのだと、どもりが減っていくことで感じました。

また、娘が楽しく教室に通ってくれたので安心しました。先生とのカード遊びはとても楽しみにしており、「早く行きたい。いつ行くの?」と言われることもたびたびありました。私もそんな娘の姿を見て不安も減り通うことができたのだと思います。

このような専門の機関と巡り会うチャンスは親が行動を起こしていかないといけないと思います。まずは、専門機関で“どもり”とはどういうことなのか、正しい知識を知ることの大切さと、親も自分の話し方を知り変えていくことの大切さを教えていただいたと思います。

『親の方が変わることで、子どもは反応して変わってくれるのだ』の『くれる』、いい言葉だとは思いませんか？ 一度もこの言葉はこの母親に使ったことはありません。もっともどんな親にも使いませんが…。

このような指導は、「いくらいい話を聞いても、それで配慮できるのは精々持って一週間だな。こんな時にはこんな対処をと聞いて、そうすればいいのかと納得、でも家に帰って来ると実際の場面ではどの場面なのかが良く分からない」という母親の声を聞き、それならば具体的ななかかわり方や話の掛け方をダイレクトに指導しよう始めたのがきっかけなのですが、20年以上行っていますが、今まで断った親は一人としていません。

他では行っていないであろうと思いましたが、「環境調整」のための一つの指導法として紹介しました。

吃音のある子の指導で「親に働きかける環境調整」が絶対条件であるように考えられているとするならば、とても危険だと思っています。

現代ような家庭状況の多様化、現在のような不景気では、必ずしも「環境調整」が上手くいくとも限らず、「家庭では、こんな配慮を」とお話しても、食べることに精一杯の家庭にとっては、先生の前では「そうですね。気をつけてみます。」と言ったとしても、実は、煩わしいだけのことかもしれません。お姑さんから「お前が注意しないからどもりになったんだ！」と言われ続けている親もいます。もちろん、こんな場合も、親の側に立って相談にのったり、知恵を絞ったりするわけです。でも、必ず限界はあります。そんなとき、『親に働きかける環境調整が上手くはかどらないこと』は、子ども（幼児期と限ってもいいです）の指導が『上手くいかない理由』になるのでしょうか？ ならないですね。

ぜひ『親に働きかける環境調整には期待薄』の状況での指導もお考え下さい。

吃音ではないのですが、AD/H Dと診断された子に対するトランシーバーを用いた親子指導については、日本特殊教育学会第45回大会（神戸大学）の論文集に掲載してありますのでご参照下さい。「形」だけは理解していただけるものと思います。また、論文で紹介した母親の感想は、「相談室のHP⇄親子ことばの相談室[システム]⇄ お家の方への直接指導」に掲載してあります。同様に参照下さい。

- ・ 次回の件、マラソン講座の実施をぜひお願いしたいです。
- ・ 吃音についての第2弾の講座でも、構音障害の講座でもなんでもOKです。期待しています。
- ・ 2日目の実技研修は、朝9時から始めても良かったです。

前の方にも書きましたが、先生が開催されてみてはいかがでしょう。企画の仕方が分からない、講師の先生に声を掛けにくいなどのことには、相談にのります。ぜひに！

2日目の件ですが、会場は山形市民活動支援センターと申しまして、市の施設になっています。公の施設ということもあって会場使用料は、無料なのです。でも、反面制約もあります。最大の制約が、開場が9時30分なのです。他の団体も、9時開場をお願いしてはいるのですが、聞き入れてもらえません。ですから、9時開会は無理だったのです。でも、実情にあわせて多少運営面で融通を利かせてくださるところはあります。9時30分前には開場してくださることにはなっていたのですが、案内としては、9時30分と表記せざるを得なかったのです。ですから受付開始は、9時10分にはできました。実際のと

ころ9時37分頃には参加予定者全員の受付が終了しました。

実技研修の時間を少しでも確保したいと思い受付時間を10分間としたのですが、先生が1日目を体験され、「2日目の実技研修は、朝9時から始めても」と実技研修の価値を感じて下さり、なお前向きな姿勢に触れますと、やはり受付時間を10分間にして良かったと思っています。

平易なことばで丁寧にお話していただけて、とても勉強になりました。

音読指導もとても良かったです。（自分自身が上手くできずがっかりした面もあります）
今回学んだことから また 試行錯誤していこうと思います。

ステップアップセミナーのような講座があっらぜひ参加したいです。

例えば・実技研修主体の講座・保護者とのかわり

・環境調整 ・グループセラピーを立ち上げるには etc

個人的には、宿泊が伴うと参加しにくいので、1日完結するタイプの講座の方が参加しやすいです。次の機会もぜひ参加したいです。

吃音を中心として 2日間の研修を組んでくださり ありがとうございます。発達障害を含めた特別支援教育の流れの中で、ことに言語について学べる2日間はとても貴重でした。

昨年の秋、小林先生の本が出版され、すぐに購入。担当の子どもへの指導に活かせるところはないかと内容を調べ取り組みましたが、何ぶん 自分勝手な理解のもとでしたので続きませんでした。

4日の小林先生の実践はとても具体的で参考になりました。きつともっともっと指導のネタがあるのではないのでしょうか。

実践編の第 弾の研修を期待しています。

梅村先生のお話（夜）の中で、舌の緊張をとるトレーニングは無用...というようなところがありました。側音化構音を指導される梅村先生の実践（VTR）を、また、別な企画で教えていただけませんかでしょうか。

懇親会での話題がありましたので、先生の感想を最後に載せました。

側音化構音の指導については、皆さん関心がおありのテーマだと思いましたが、少し述べさせていただきます。

側音化構音への指導で、皆さんよりも若干長くこの教育に携わっていると思いますが、「舌の緊張をとるトレーニングは無用」というより、これまで必要性を全く感じたことがないのです。気がついたら世の中（ことばの教室界限）にこんな根拠のない指導がまかり通っていることに憤りを感じたくらいです。

「舌の緊張をとる」と言いますが、側音化構音の原因は「舌の緊張」なんですか？

「舌の緊張」が原因ならば、これは機能的構音障害（“**的**”の方が正確です。一方、器質性構音障害の場合は、“**性**”の方が正確です）とは呼べませんね。にもかかわらず「舌の緊張をとるトレーニング」を行うって、無駄だ、変だと思いませんか？

県内外数箇所（舌の緊張をとるトレーニングや母音の指導や/i/からの指導を行っている県や学校）で「子どもを育む構音指導の実際」や「子どもを育む構音への指導」の演題

で、話をさせて頂きましたが、その際、「舌の緊張をとるトレーニング」等々の指導の必要性を伺っても納得できる説明を受けたことはありません。異口同音に、せいぜい「研修会で教えてもらった」が回答でした。でもこれって、根拠じゃないですよね。どうして自分が根拠を説明できない方法で指導を行うのでしょうか。いや！行えるのでしょうか？ そんなのって子どもや親御さんに失礼だとは思いませんか？

先生は、**機能的構音障害としての側音化構音**の指導に「舌の緊張をとるトレーニング」を行う根拠を説明できますか？ 逆に「舌の緊張をとるトレーニング」をしない根拠は、簡単です。「舌の緊張」が原因ではないからです。

脳性麻痺による舌や周辺筋の過緊張へのリラクゼーションや成人の脳疾患による麻痺性構音障害への訓練などを経験すると、機能的構音障害としての側音化構音へ「舌の緊張をとるトレーニング」を行おうとすることがいかに無意味なことか、感覚で理解できると思います。ぜひ体験してみてください。

それからもう一つ。

/k/が/t/に置換されている場合、/ki/が/tʃi/に構音されることがあります。また/t/が/k/に置換されている場合、/tʃi/が/ki/に構音されることがあります。では、この場合、どうして「舌の緊張をとるトレーニング」を行わないのでしょうか？ 置換にしても側音にしても目指す構音運動は、/ki/や/tʃi/の構音運動のはずで、同じ構音運動のはずなのですが…。要は、/ki/や/tʃi/の構音運動ができればいいわけですよね。

繰り返します。『/tʃi/が/ki/になっている場合の形成したい/tʃi/の構音運動』と『側音化構音の/tʃi/になっている場合の形成したい/tʃi/の構音運動』が異なる構音運動というなら、指導方法が異なるというのは至極当然で理解できます。でも、そんなこと有り得るわけないでしょう。ですから、『/tʃi/を/ki/に構音する場合の/tʃi/の構音指導』では、なぜいけないのでしょうか？ ぜひ、どなたかご説明下さい。

それから、/ki/や/tʃi/が側音化構音になっている場合、**/i/が側音化構音になっていたとしても/tʃi/から指導を始めます。**この方が/i/が出やすいからです。**ですから、/i/のみを取り上げての指導も必要ありません。**

この辺のことは、**親子ことばの相談室のHPに「子どもを育む構音への指導」として掲載してあります**のでご覧下さい。この中でも、「指導者心得8か条」「構音障害Q&A」にはぜひ目を通していただければと思います。各論では、/i/の側音の構音運動及び下顎の偏位のスロー再生などがご覧頂くことができます。

ここまでは、『機能的構音障害としての側音化構音』の指導について述べてきました。でも、実は、3年生になってもスキップができない、巧緻動作にも問題があるなどで、どうも器質もあるのでは？と疑いたくなる子どもにも出会っています。

また、現在縁あって矯正歯科にも非常勤（週1日）で勤めているのですが、上顎・下顎形態の問題も無視できないお子さんもいます。指導ができないわけではありませんが、予後の判定には、十二分に留意しなければなりません。

HPでは述べていないことを少々述べ、終わりとしたいと思います。しばらく我慢の程。この年齢にしてはまだまだ可塑性は持っていると思っております。ですから、以下のような条件で、側音化構音が早期に解決する指導方法がありましたら、教えて下さい。

どんな特殊な指導法でもかまいません。「その人にしかできない特別な方法」でもかまいません。何でも初めは「その人にしかできない特別な方法」なのですから。すぐにでも出かけて行き、教をを請います。

条件 「教育に馴染む」方法であること

- 構音の仕方の指導（構音点指導）が、即コミュニケーションになっている指導。少なくとも、鏡を使用しない構音指導。これまで鏡を使用して構音点指導を行っていた先生曰、「鏡に向かっていてもコミュニケーションが取れていたと思っていたけど、ぜんぜん違いますね、実感が...。」
- 構音指導そのものが、緘黙的傾向のある子や吃音のある子の指導にもなり得る構音指導。一人の子どもの中に、構音障害と吃音の問題が2つあるとは考えない子どもの見方ができる構音指導。子どものお口は1こですから。

「吃音や緘黙の問題にある程度目処がついてから、構音指導に移行する」というのは、問題が2つあるという問題の見方です。このような見方が前提になる構音指導なら学びたいとは思いません。

条件 幼児（年少から）でも楽しめて、なおかつ、正しい構音運動に簡単に導くことのできる構音指導

「舌の出し入れの模倣」って生後どのくらいでできると思いますか？ 実は生後たったの2時間なのです。安定した母と子の雰囲気の中で、母親が赤ちゃんの目の前で舌の出し入れをすると次第に赤ちゃんが舌を出したり引っ込めたり始めます。だいぶ以前にNHKの番組で見たのですが、その頃、うちの子が10ヶ月だったので、生後2時間で「舌の出し入れの模倣」ができるなら、10ヶ月の赤ちゃんが /tʃ/ の模倣ができないはずはないとやってみました。舌の動きが見えるように /t/ を歯間にはしましたが、見事、できました。そのくらい /tʃ/ なんて簡単な構音運動なのです。この場合、『側音化構音の /tʃi/ になっている場合の形成したい /tʃ/ の構音運動』と『赤ちゃんの /tʃ/ の構音運動』は異なる構音運動なのでしょうか？ 厳密には歯間音ではありますが、この際このことは問題になりませんよね。

このような話をすると、必ずと言って良いほど「誤った構音を直すのであって、新しい構音を育てるのではない。」との反論を頂きます。

ここで、よく考えて下さいね。赤ちゃんにはそれこそ「自分の構音が誤っている自覚」や「直そうとする意欲」なんてないです。さらに、「誤った音と正しい音の弁別」もできません。でも、『 /tʃ/ の構音運動』は、できるのです。

従って、逆の言い方をすれば、特に幼児の構音点指導においては「自分の構音が誤っている自覚」や「直そうとする意欲」それに「誤った音と正しい音の弁別力」なんて必要ないということになります。

もう一度力説します。『側音化構音の /tʃi/ になっている場合の形成したい /tʃ/ の構音運動』と『この赤ちゃんの /tʃ/ の構音運動』は**同じ構音運動**なのです。

ですから、「自分の構音が誤っている自覚」「直そうとする意欲」「誤った音と正しい音の弁別力」なんて必要のない構音点指導であるならば、学ぶ価値は十

二分にあると考えているのです。

『生後2時間の赤ちゃんの舌の出し入れの模倣』と『10ヶ月赤ちゃんの /f/ の構音運動の模倣』のビデオは相談室にあります。ご覧になりたい方はどうぞ。

条件 構音点指導も、直接吃音のフルエンシーにかかわる指導になる構音指導
「共調発語」ができるようになると、これができるんですね。

条件 条件 ~ を満たしつつ、/ki/ や/fji/の構音で、初回面接を入れて、多くても通級5回目までにはそれらの構音が音節レベルで、9割くらいの子どもに可能となるような構音指導。もしくは、7割くらいの子ども（幼児を含めて）が25回以内の指導で**全く普通の構音運動になり**終了となる構音指導

「この程度で終了」は、許されません。子どもや親御さんに失礼です。どんな想いで通級させてきたと思います？ 『機能的構音障害としての側音化構音』と考えるならば、全く普通の構音になって良いはずです。そうですよね。

側音化構音の場合、普通の構音での練習が可能になっていたものが、夏休みなどの長期休暇明けに元の側音化構音になっていたり、指導を終了した後しばらくすると元に戻ることがあります。

理由は全く分かりません。ただ、「元に戻った」と相談を受けたときの「元に戻った」の多くは、『初めから直ってはいなかった』と考えられるのです。原因は、はっきりしています。指導者が、「それらしく聞こえるようになった」とほどほどのところで終了しているからです。ですから、しばらくぶりに会った時、側音に気がついて、指導のミスで「戻った」と理解してしまうのです。

『7割くらいの子ども（幼児を含めて）が25回以内の指導で全く普通の構音運動になり終了となる構音指導』は、以上のことも条件に入れての『25回』なのです。

「早ければ良いというものでもない」とおっしゃる先生もいます。そうでしょうか？ 構音指導終了と同時に、もしくは若干早めに緘黙の問題が解決し構音も改善されているというのはダメですかね。例えば、親子ことばの相談室のHP、「子どもを育む構音への指導」の「その4 レポートや論文の紹介」にあります『「話をしない」ことと「発音の誤り」を主訴に来室したえい君の2回目の指導の中での変化』に出てくる指導は、自分としては早かったと思っているのですが、「早ければ良いというものでもない」に該当するのでしょうか？ ご判断下さい。

条件 /i/及び/ki/系や/fji/系の側音で下顎の偏位もあり、もちろん被刺激性・浮動性もない側音化構音障害で、初回面接を含め5回で終了（芋舌・偏位の消失、会話への定着）させたことのある構音指導を経験された先生がいらっしゃれば、とりあえず教えを請いに伺います。その上で、その方法が条件 ~ に該当するならば、即現在行っている構音指導は捨て、本格的に教えを請いに伺います。

なぜ5回か。親子ことばの相談室のHP「子どもを育む構音への指導」の「その4 レポートや論文の紹介」にあります『構音指導における「構音改善」に関わるいくつかの要因について - 指導事例を通して - 』のA児の指導が初回面接を

入れて5回で終了させたことがあるからです。この子の2回目の指導のビデオがあります。ご覧になりたい方はどうぞ。

このように書くと、「自分の指導方法より優れた指導はない」と天狗になっているんだろうと誤解を受けるのを承知で書いています。

ところで、世の中には、様々な考え方や指導方法があります。自分の知らなかった方法で、どうも良さそうだなと思える方法に出会った時、知った時どうされるのでしょうか？

一番楽な方法は、「世の中色々な方法があるから、あっちはあっち、こっちはこっち」と考えることです。つまり、悪い意味で3猿になることです。**二番目に楽な方法**は、「偶然、たまたま上手くできた」「子どもが良かったから上手くいったんだろう」と考えることです。**三番目に楽な方法**は、「あの方法は、とっても特別な方法で、あの先生にしかできない方法」と考えることです。

そうすれば心も痛まないし、学ぶ努力の必要はないし、体力・時間・お金も使わないし、何よりいいのは、その後も、何ら変わることなく、今まで通りの考え方と方法でやれるわけです。

でもこれらって、親や子どものことが全く念頭にない発想ですよ。指導者としての可塑性もなければ向上心も全くないわけですから。そんな人から、「親や子どものニーズに応えて」なんていう綺麗なフレーズは聞きたくないですよ。どの発想の一つを取ってみても後ろ向きで「ニーズに応えたくはありません」と言っているようなものです。ですから親なら、こんな先生から指導を受けたいとは思いませんよね。自分が親だったら、どうでしょう？ 「こんなとんでもない発想を自分がしているなんて親は気づくはずはないのだから、黙っていればいいだけ」は、あり...？

私の大先輩に、吃音の指導では、各地で「吃音のある子の指導」の講演をされていた先生がいます。その先生が、ある学会でシンポジストをされた時、最後に「私は、今考えている指導よりいい指導や他の指導があれば、飛んでいきます」と話されました。

常にベストを目指すのが、自分の指導はベターと考える姿勢は見習わなくてはならないと感じました。ですから、今自分が行っている、また考えている構音指導は、ベターであってもベストではないと思っています。

でも、「ベターだから」と安心しているわけではありません。「もしかすると、今自分が行っている考え方や指導方法は、他では、ワーストなのかもしれない。」という危機意識と不安感は持ち続けています。ですからアンテナを張り巡らし、高くし、世の中の動向に敏感になるよう、今も努めているつもりです。自信を持って「努めています」と言えないのが寂しいですね。どこまで追い求めることが自信のある「努めています」に相当するのかの基準がありませんから、「ここまで」と基準を設定した時点で、墮落が始まるのでしょうかね、きっと。

ここを書いていて、ふと感じたことがあります。もしかすると、講師の先生方に対して、も上から目線の感想が幾つかあったと思うのですが、それって、「自分の方が、もっと効果的な指導をやってるよ」というサイン？ 短い時間で書いてくださったので、結果そのような表現になってしまったのだらうとは考えていたのですが...。違ったかな...？

「側音化構音を指導される梅村先生の実践（VTR）を、また、別な企画で教えていた

だけませんか。」とのご要望ですが、残念ですが、今のところその計画はありませんし、計画の予定もありません。

ただし、先生が「**たられば族**」でないならば、道は3つあります。

「先生が企画する」、「先生が山形の研究会に参加する」、「先生が個別に山形を訪れる」の3つです。ただし、**山形**の場合、条件があり、**山形**に準じます。

研究会は、基本的には月1回です。8月は、28日(土)の予定です。でも、この研究会には参加資格(入会資格ではありません)があります。HPのトップから『各種研究会・講座のご案内』を開きます。「言語臨床教育研究会のご案内」の「初めて参加される方へ」をクリックしますと、「参加の条件」を見ることができます。**そう難しい条件ではありません**、子どものことを考えたら極普通、極当たり前のことですので、どうぞいらして下さい。また、『泣く子は、育つ』と言われている**言語発達障害研究会**に「指導検討」や「事例研究」で話題を出されことのある先生は、**無条件での参加**を認めています。

側音化構音の指導ビデオは沢山あります。その中から、幼児(年中児)の指導(通級3回目の指導で「ち」が出るまで)、4年生の指導(指導開始から10数分で「ち・し」が出るまで)を主に視聴してもらい、それぞれの構音ができるまでの解説を行ってもかまいません。家内からは、「そろそろ別の子にしたら、その子しか短期間に構音が出た子はいないと思われるよ」とは言われていますが、保護者と高学年においては本人の了解が必要です。今のところ広げてはいません。先生が個別に山形にいらっしゃるのであれば、話は別で、遠い山形の地を訪れるわけですから、緘黙的傾向があり側音化構音のあるお子さん(年長女兒)の初回面接から指導終了(10数回)までの指導(この子の母親は、発音の改善よりも話を誰とでも楽しんでできるようになったことを喜んでいました)を編集なしで見てもらっても良いと思います。

先生方の『感想・意見・質問』に触発され、かなり長い『感想・意見・回答』になってしまいました。申し訳ありません。中には、今回参加された先生方には、全く該当しない内容もあるかと思えます。その場合は、読み流していただければと思います。

このような研修会を開催させていただいて毎回、先生方の子や親を想う強い気概に触れ、私自身を振り返り、反省しきりです。そういえば本漁りを最近してないなあ。まだまだ勉強が足らんと。

本当に、貴重な感想とご意見、ありがとうございました。

ところで本研究会では、『共調発語』の練習は当然ですが、会員がトランシーバーを着けて、AD/H Dと診断された子とのかかわり方や吃音のある子との会話の練習(指導者のための遊びのレッスン)などの実技研修も行っています。

年間会費は、ありません。月の参加毎に1000円いただいています。

山形言語臨床教育研究会のHPは、先に述べましたように、「親子ことばの相談室」のHP [アドレス; <http://www.i-kotoba.com>] から『各種研究会・講座のご案内』を開きます。開催日時は、「今月の開催案内」か「諸連絡」からご覧いただく事ができます。

どうぞご参加下さい。